

事例紹介

4

医療業 / 病院事務

杏林大学医学部付属病院

(東京都三鷹市新川6-20-2)

2004年2月現在、杏林大学医学部付属病院に勤務している障害者は6人。



健常のころより患者さんの気持ちがわかる

杏林大学医学部付属病院は、1970年の開設以来、東京西部地区三多摩の中核的医療センターとして、首都圏一円の人々の健康と生命に多大な貢献をし続けています。病床数1,162床、外来患者数一日平均2,028人、入院患者数一日平均836人。医師354人、看護師923人をはじめとする約2,000人も医療スタッフや病院職員を擁する日本有数の特定機能病院のひとつです。

特に第3次高度救命救急センター（脳神経外科、心臓・循環器、熱傷などに即応する高度救急医療）と、総合周産期母子医療センターは、24時間休むことなく活動しています。さらに、外来棟の臓器別の診療科方式、受診する診療科がわからない患者のための総合診療科、あらゆる眼疾患に対応できる眼科総合医療センター「アイセンター」、待ち時間短縮のためのオーダリングシステムなど、患者側からの発想による新しい医療サービス体制を整えています。

この高度先進医療を推進する同病院には、6人ものそれぞれに障害を持った人たちが、日々さまざまな職域で活躍しています。そのひとりである前原俊明さん



PROFILE

前原 俊明（まえはら としあき）さん
1950年生まれ 53歳。
障害は両下肢機能障害（1級）。

1975年、杏林大学医学部付属病院の病院事務職員として採用される。49歳のとき、原因不明の病気により下半身不随に。現在は、病院事務部課次長として在籍。

は、車イスの病院事務部員です。

「病院事務部は、一般事務とクレーム処理が主な仕事です。クレーム対応には人間性が求められます。障害を負う前にいた医事課時代から、患者さんに何かがあると、大きな体をゆすって真っ先に駆けつけていました。今はそれができないのが歯がゆいですが、自分が障害者となって、今まで以上

に患者さんの立場に立てるようになったことと、患者さん側も、障害者である私に心を開いてくれるようになったことがうれしいです」と前原さん。

同病院の医事課に勤務していた前原さんが、突然、原因不明の病に襲われたのは、1999年10月、49歳のときでした。病名は後縦靭帯骨化病および広範脊柱管狭窄症という難病で、自分の足で歩けないとわかったとき、死を考えるほど絶望したそうです。

意欲を持って働ける職場がある幸福に感謝

日大柔道部出身で、柔道5段の猛者だった前原さんが杏林大学医学部付属病院に就職したのが、1975年。病院事務員として勤務するかたわら、米軍横田基地の柔道指導員もするほどの頑健な体でした。それが突然の車イス生活となったのです。

「病院ではポストを空けておいてくれて、すごくありがたかったです。でも、仕事に復帰してからも、実は心に深い屈託がありました。障害者の自分は半人前の仕事しかできない。同僚に迷惑をかけているのではないかと、すごい負い目がありました」



企業の採用担当者は、 もっと障害者が働く現場へ足を運び、 彼らの働きを実際に見るべきです。



電話の対応にもスポーツマンらしい明るさとおおらかさがにじみ出てくる前原さん。

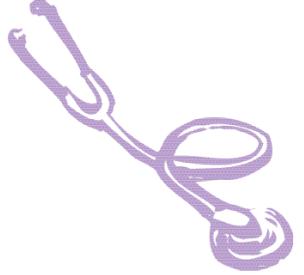
そんな迷いを吹っ切ってくれたのが、管理責任者である原哲夫病院事務部長の一言でした。「前原、そんな体じゃ、好きなパチンコもできないだろ」とニヤッと笑ってからかったそうです。

「その一言に、本当に救われたんです。フッと心の力みが消えたんです。原事務部長は以前と全然変わってない。変わったのは、周囲ではなく自分の方。そう思えたんです」

原事務部長は、車イススタッフとなった前原さんへの対応策について、「段差のあるオフィスだった医事課から、病院事務部に配置転換したことと、体が大きく車イスも大きい前原のために、机を高くしたこと以外は何もしていません。病院なので、元々すべての施設がバリアフリーでしたからね」と答えてくれました。

前原さんは、現在、車イスで他の同僚とまったく同じに勤務しています。

「でもやっぱり職場の人たちに迷惑をかけてると思うときもあります。それが職場の雰囲気や反映して互いのストレスにもなります。障害者も、ひとりの職業人として当然評価されたいんです。自分が役立っているという気持ちが意欲をかきたてるんです」



「今はすごく幸福です。障害を負って失ったものもありますが、それと同等、あるいはそれ以上のものを得たと思います。職場の人たちにはもちろんですが、妻にも気遣いができるようになりました。やはり一番負担をかけているのは妻ですから。健康のときには、自己主張ばかりで、それができませんでした。体のハンディが、思いやることを芽生えさせたんです。それもこれも、意欲を持って働ける職場があるからなんです」

「障害者をもっともっと社会へ出るべきです。また、雇用者側も、先入観にとらわれなくて、もっともっと障害者を雇用すべきです。意欲やすばらしい技能を持った障害者はたくさんいるのですから」。これは前原さんの率直な思いです。



Just the point

なにしる日々、あらゆる障害を持った患者さんと接していて、障害者への誤解も偏見もない職場ですからね。

杏林大学医学部付属病院 病院事務部長
原 哲夫（はら てつお）さん

本病院では、6人の障害者を採用していますが、これといったトラブルは起きていませんし、定着率も高いですね。ノーマライゼーションを阻害しているのは、誤解と偏見だと思います。たとえば、女性が女性だという理由で、ひとくりにされて、雇用機会や職域を差別されたら、彼女たちは不当だと怒るはず。女性ひとりよりの能力や技能には相違があります。男性より優秀な人もたくさんいます。障害者もまったく同じことが言えます。企業の採用担当者は、もっと現場に足を運び、障害者が意欲的に働いている状況を実際に見るべきだと思います。そうしたら、誤解や偏見が解けて、もっと有効な人材活用が実現できると思います。